

高崎市文化財調査報告書第102集

西島相ノ沢遺跡

—— 厚生年金保養施設「サンピア高崎」建設に伴う

埋蔵文化財の発掘調査概報 ——

1990

群馬県高崎市教育委員会

序

高崎市は群馬県西部に位置し、古来より文化・伝統のある町として栄えてきました。古くは観音山古墳・観音塚古墳に代表されるような古墳文化を持ち、また、山ノ上碑・金井沢碑といった仏教文化の伝来を物語る遺跡も残されています。こうした文化財は、私たちの祖先が残した歴史・文化を窺い知ることのできる重要なものです。一方、より豊かな市民生活の向上を目的とした開発の波が強く押し寄せていることから、文化財保護との調整には苦慮するところであります。

さて、ここに報告いたします「西島相ノ沢遺跡」は、厚生年金保養施設「サンピア高崎」建設事業の事前に実施した埋蔵文化財の発掘調査です。調査によって、弥生時代後期から古墳時代中期にかけての集落跡が発見されました。特に、古墳時代中期の住居跡は調査例も少なく、本書によって貴重な資料を提供できると思います。

本遺跡調査中の昭和64年1月7日、奇しくも昭和天皇崩御・平成改元という歴史の大変革に遭遇したことは、私にとって誠に感慨深いものでありました。

最後に、調査実施にあたって御協力・御指導いただいた関係諸機関・調査担当者・発掘作業に多大な尽力をたまわりました皆様に厚く御礼申し上げます。

平成2年3月

高崎市教育委員会
教育長 茂田 治男

例 言

- 本書は、厚生年金保険施設「サンピア高崎」建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査概報である。
- 調査対象地面積は、4.7ヘクタール。町名・字名・地番は次の通りである。
高崎市島野町字相ノ沢 1329～1349番地
西島町字間ノ沢 160～199番地
新保町字山王 1321～1334番地
- 調査は、高崎市工業団地造成組合の委託を受けて高崎市教育委員会が実施した。
調査組織 昭和63年度 社会教育課文化財保護係
事務局 市田哲夫 中澤寛哉
調査担当 中村 茂 関口 修 星野守弘
平成元年度 文化振興課埋蔵文化財係
事務局 横倉典一 中澤寛哉 設楽義子
調査担当 中村 茂 関口 修 星野守弘
- 調査期間 発掘調査 昭和63年10月11日～平成元年3月16日
資料整理 平成元年3月17日～平成2年3月31日
- 本書で報告する遺跡の名称は「西島相ノ沢遺跡」とする。高崎市教育委員会の遺跡調査番号は「132」である。
- 本書の編集・執筆は、中村・関口が分担して行った。
- 基準点測量は柳田中測量設計、掘削重機及び諸資材は柳井上総合リース、空中写真撮影は柳青高館にそれぞれ委託した。石材同定は飯島静男氏に依頼した。
- 発掘調査から本書刊行まで、下書の方々の御指導、御助言をいただいた。(敬称略)
相原建史 小島敦子 坂口 一 田口一郎 外山政子
- 遺物及び図面等の資料は高崎市教育委員会が保管している。

凡 例

- 調査時及び本書では次の略号を用いた。
SI—竪穴住居跡 SD—溝跡 SK—土坑 SE—井戸跡
- 本書の挿図縮小率は各図ごとに示したが、概ね住居跡平面図・エレベーション図は1/60、カマドや貯蔵穴のセクション・エレベーション図は1/30、遺物図は1/3である。

目 次

序

例言・凡例

目次

I. 発掘調査に至る経過	1
II. 発掘調査の経過と方法	1
1. 調査の方法	1
2. 調査の経過	2
III. 地理的歴史的環境	3
IV. 検出した遺構と遺物	5
1. 遺構・遺物の概要	5
2. 住居跡	6
(弥生時代)	6
(古墳時代)	9
3. 土坑	56
4. 溝跡	60
5. 水田跡	72
6. 遺物観察表	73
遺構・遺物の写真	90

I 発掘調査に至る経過

遺跡地周辺の水田地帯は、昭和58年度から「西島地区園場整備事業」が行われ、その余剰地である約4.7haの空間に、厚生年金施設「サンピア高崎」の誘致が計画された。

埋蔵文化財の有無について照会を受けた高崎市教育委員会は、対象地東側での園場整備事業に先行する発掘調査で、浅間B軽石下水田跡・浅間C軽石下水田跡が発見されていること、さらに対象地西南隅付近の用水路建設の際に多量の土器が掘り出されていることから、当該地は弥生時代から古墳時代・平安時代にかけての遺跡地である旨を回答した。

昭和63年、「サンピア高崎」の建設が本決まりとなり、昭和63年10月から翌年3月までの期間で発掘調査を実施することになった。

II 発掘調査の経過と方法

1 調査の方法

対象地は約4.7haという広範な地域であるが、中央付近に園場整備以前に存在した間ノ沢と称される小河川を境にして、遺跡の性格は異なる。間ノ沢以西は若干の微高地となり、住居跡が予想され、間ノ沢以東の低地では水田跡の存在が確実であった。

そこで、遺構の広がりを見るために、何本かのトレンチを入れて、必要に応じて拡張することにした。その結果、対象地南西隅の1・2区で住居跡が見つかったので拡張し、北端の7区では、天仁元（1108）年噴出とされる浅間B軽石に埋設した水田跡が確認されたので、拡張して調査した。その他の調査区（3・4・5・6・8区）では、B軽石の遺存が悪く、畦畔などは検出できなかった。

検出した遺構の測量にあたっては、国家座標のついた基準点を10m間隔で設置し、全体図は平板測量で縮尺1/40、個々の平面図と出土状況図・セクション図・エレベーション図などは、必要に応じて1/10または1/20の縮尺で作図した。

遺構・遺物の写真は、モノクロ35mm、カラーリバーサル35mmを用いて撮影した。また、遺跡全景写真はバルーンによる空中撮影を行った。

2 調査の経過

- 〈10月上旬〉 調査準備に入る。
- 〈10月中旬〉 8区から掘削開始。浅間B軽石はすでに掘削されている。畦畔は検出できないが、水田土壌である。
- 〈10月下旬〉 1・2区掘削。1区は住居跡、溝などの遺構が密な状態で確認できる。土器が大量に出土。2区は1区ほどではないが住居跡と溝あり、精査開始。
- 〈11月上旬〉 住居跡は弥生後期・古墳前期～中期に属する。5号住居跡から古式須恵器坏身が出土。16号住居跡では石製模造品が出土した。
- 〈11月中旬〉 1・2区拡張。北隅の7区で浅間B軽石下水田跡確認。畦畔3本検出。
- 〈11月下旬〉 1・2区拡張部遺構確認作業。住居跡の重複激しい。31号住居跡精査。
- 〈12月上旬〉 32号住居跡はカマドつき。カマドの軸は灰・焼土の上に灰色粘土で構築、臼玉がまわって出た。臼玉は112個となる。
- 〈12月中旬〉 34・35・36・37号住居跡精査。11号井戸から舶載青磁片出土。19号住居跡の覆土は土器が密集している。
- 〈12月下旬〉 19号住居跡から出土する土器は樽式土器が主体だが、外来系土器も混在する。古墳中期の住居跡にはカマドを持つものと持たないものがある。
- 〈1月上旬〉 14号溝の覆土中に浅間C軽石主体層を確認。C軽石の上にも下にも樽式土器と外来系土器が混在する。1月7日、昭和天皇崩御、平成元年となる。
- 〈1月中旬〉 14号溝のC軽石上層の土器上げ。続いて下層の調査に入る。14号溝は樽期の54号住居跡を切り、古墳中期の47号住居跡に切られる。
- 〈1月下旬〉 14号溝から17号溝が分岐し、15号溝とともに弥生後期から古墳前期にかけて存在した集落を囲む環濠の可能性が高い。
- 〈2月上旬〉 1・2区の調査続行。住居跡は70軒を超える見込み。
- 〈2月中旬〉 予算乏しく以後は少人数で続行。75号土坑は土器を敷き詰めたような円形土坑で、焼土・灰を多く含む。
- 〈2月下旬〉 1区西・2区拡張部遺構確認。2月24日大嘗の礼による休業。
- 〈3月上旬〉 15号溝はC軽石上層に特に多く土器を含む。掘方はVの字に近い。
- 〈3月中旬〉 1区南の78号土坑精査。完形の坏・甕・鉢・甗などが入れ子状に出土。3月16日、発掘調査終了。

以後、平成2年3月まで断続的に整理作業と報告書作成作業。

III 地理的歴史的環境

1. 地理的環境

本遺跡(1)は、高崎市新保町字山王、西島町字間ノ沢、島野町字相ノ沢に所在する。市街地の東北東約4kmの位置である。遺跡地の西約500mの地点には染谷川が南流している。染谷川はさらに南の位置で、利根川の支流である井野川に合流する。染谷川の左岸は自然堤防である。川のすぐそばは小さく、そこから東に向かって若干低くなり、東端では再び小さく微高地状となる。本遺跡はこの自然堤防の東端付近にあり、ここから東にかけては低地が広がる。なお、自然堤防の縁近くに間ノ沢と称される沢が存在した。この位置には調査時点も規模の小さな北からの水の流れがあった。

2. 歴史的環境

周囲に旧石器時代の遺跡はない。縄文時代では草創期の尖頭器が元島名瓦井遺跡(2)で発見されている。出土したのは平安時代水田面下部の泥流洪水堆積物層中であり、付近に遺跡地があると考えられる。前期の遺構・遺物は宿大類天神(3)、宿大類村西遺跡(4)、中期は宿大類万相寺(5)、矢島町村西遺跡(6)、後期は宿大類万相寺、元島名遺跡(7)にある。

弥生時代の中後半の遺構・遺物は少なく、新保遺跡(8)で住居跡が、矢島竹ノ内遺跡(9)で竈基が発見されている。後期になると遺跡数が増加する。新保、鈴ノ宮(10)、宿大類万相寺遺跡では住居跡が調査されている。日高(11)、新保、鈴ノ宮、上大類宅地遺跡(12)では方形周溝墓が発見され、西島IV遺跡では竈基(13)がみつかった。

古墳時代前期では、浅間C軽石層が覆土中にあり外来系土器が出土する住居跡が新保遺跡で調査されている。また、古墳前期の規模の大きな集落が鈴ノ宮遺跡で発見され、同時に方形周溝墓が調査されている。貝沢柳町(14)、上大類宅地遺跡では浅間C軽石降下以前の古墳時代の方形周溝墓がみつかった。

浅間C軽石に埋没した水田跡は日高、西島II(15)、新保田中村前遺跡(16)で発見されている。また、C軽石が埋没土中位にある溝が京目作道遺跡(17)で調査されている。6世紀初頭の榛名山噴出の火山灰(FA)に埋没した水田跡は新保遺跡で調査されている。

奈良・平安時代の遺構・遺物の調査例は多い。宿大類天田・川押(18)、宿大類万相寺、宿大類村西、西島IV遺跡などである。西島IV遺跡では、大溝から木製の人形と甬串が、平安時代の5号住居跡からは炉跡と推定されるピット、増堀、珣口、三結杵の鋳型、鉋跡が出土しており工務址とみられる。宿大類川押遺跡では住居跡から八咫鏡が発見されている。

平安時代の末、天仁元(1108)年浅間山噴出のテフラに埋没した水田跡が広範囲に検出され



1 : 50000 第1図 周辺の遺跡

る。日高、京目作道、西島I(19)・II・III(20)、新保田中村前、島野大岩(21)、宿大類天田、宿大類山島・天神遺跡などである。

中世では、西島IV遺跡で館址の大部分を調査している。宿大類村西遺跡は大類城の北部分となるが、何重にも囲む幅広い堀跡が発見されている。他に、宿大類天田館址(22)、矢島町村北館址(23)などの調査例がある。また、天田II遺跡(24)では中世の墓地を、山島遺跡(25)では周囲を堀で囲われない掘立柱建物跡群が検出されている。



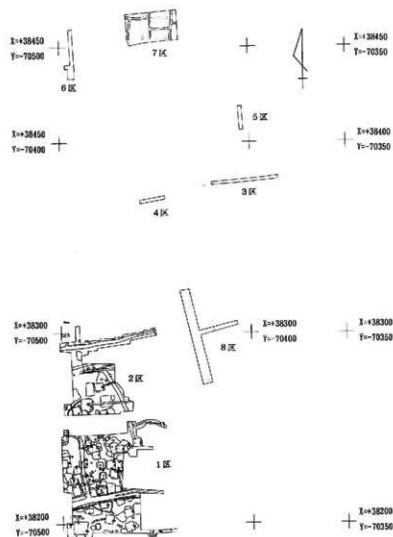
1 : 10000 第2図 調査位置図

IV 検出した遺構と遺物

1. 遺構・遺物の概要

縄文時代の遺構・遺物は検出されていない。

弥生時代前期・中期の遺構・遺物は検出されていない。後期になってムラが出現する。1・2区は対象地内の旧間ノ沢以西にあり、染谷川左岸の自然堤防の東端に属する。この堤防上には新保町山王の集落があり、地名の基となった真言宗華严寺と日枝神社が、神仏混交時代の名残りを留めて現存する。かつて、山王地区の側溝工事の際、多量の土器が出土している。



1 : 2000 第3図 調査全体図

(1) 住居跡

70軒の住居跡はすべて、1区・2区で検出した。

樽式土器出土—31軒 古墳時代前期—9軒 古墳時代中期—28軒

中世竪穴状遺構—1基 時期不明—1軒

樽式土器出土の住居跡のうち、同時に外來系土器があったり、古墳時代に位置づけられる樽式土器の場合もある。よって、これらの住居跡は弥生後期から古墳前期までの時期幅があると考えられる。中世竪穴状遺構(66号)は覆土に二次堆積の浅間B軽石を含むが、部分検出で細部不明である。

(2) 水田跡

対象地北隅の7区で、浅間B軽石に埋没した水田跡を検出した。調査面積は400㎡ほどである。なお、1・2区を除く対象地の大部分はB軽石が攪拌され遺構は残っていないかったものの水田土壌の存在が確認され、かつて水田跡があったと考えられる。

(3) 井戸跡

1・2区で合計13基の井戸跡を検出した。中世から近世にかけての井戸跡である。3号井戸から桃核、11号井戸から舶載青磁片が出土した。13号井戸からは、軟質陶器鍋片、12号井戸では、近世瀬戸美濃産播鉢が出土している。

(4) 溝跡

古代から近代にかけての溝跡を20条検出した。このうち、14号・15号溝は覆土中位に浅間C軽石の純層に近い層があって、古墳前期には存在したとみられる溝である。この両溝の東・北側では住居跡は検出しておらず、ムラと外界を画する垣壕の可能性もある。

(5) 土坑

土坑は80基検出した。古墳中期の78号土坑は、完形土器が入れ子状に積み重なっていて、意図的な埋納も考えられる。その近くの75号土坑は、土器を敷き詰めたような状況でその上には焼土・灰が多く認められた。

2. 住居跡

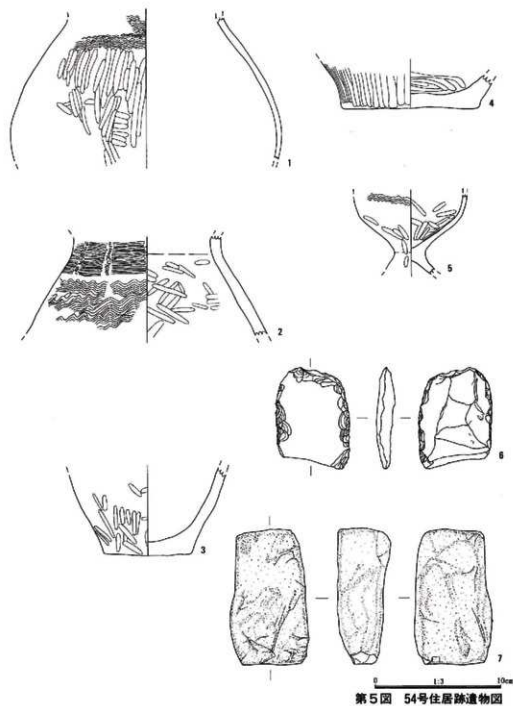
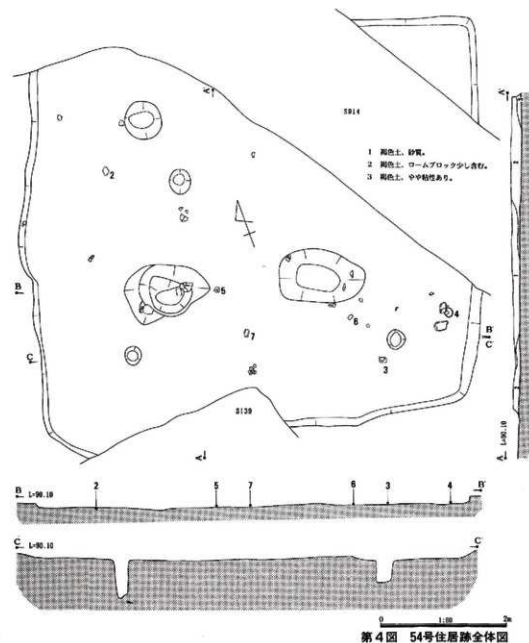
(1) 弥生時代

54号住居跡

2区東側で検出した。東辺から北辺にかけて14号溝(浅間C軽石が覆土中位に入る)に切れ、西辺を39号住居跡に切られる。住居の規模は7.1×6.5m、東西にやや長いが方形に近い。深さは8~10cm程度、床面は概ね平坦である。埋土にC軽石は含まれない。主軸はN—79°—Wである。柱穴は3本検出した。北東隅の柱穴は、14号溝に切られたと考えられ、柱穴の深さは

30～60cmである。炉・貯蔵穴は検出されなかった。中央南寄りに土坑を2基検出したが、住居に伴う土坑ではない。

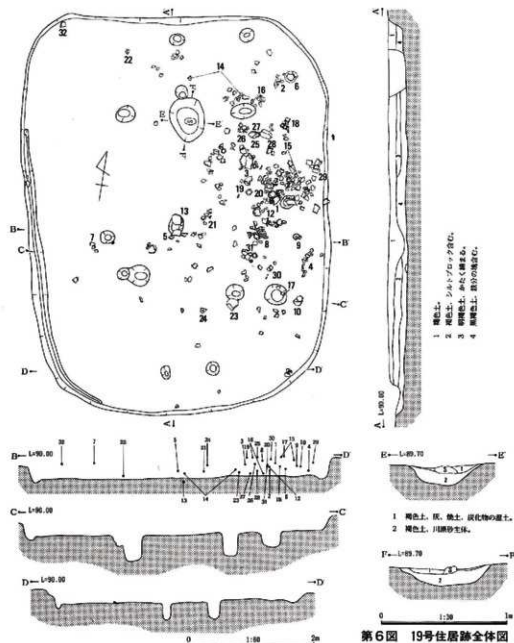
遺物は少なく、弥生後期の壺・甕・台付甕がある。他に敲打痕のある石（砂岩）が出土している。



(2) 古墳時代

19号住居跡

1区中央西にある。住居跡の主軸はN-11°-W、平面形は南北に長い隅丸長方形で、構式段

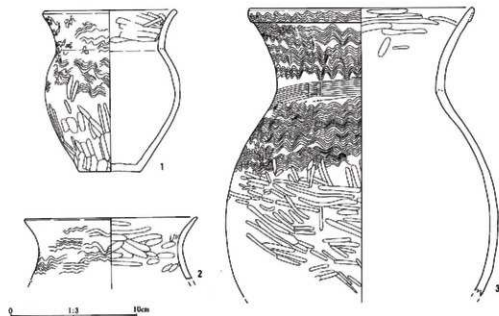


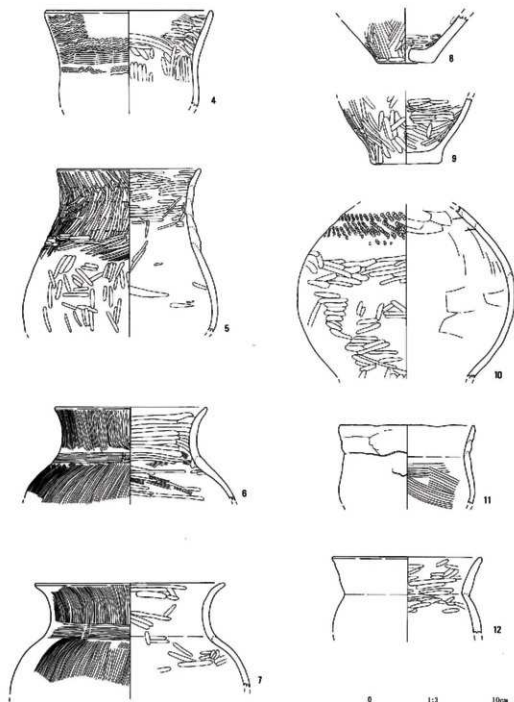
際に特徴的な形である。南北規模は6.35m、東西4.7m、確認面からの深さは25cm程度である。主柱穴は中央に4本、深さは40~50cmである。住居跡南部には対になった、入り口と考えられる2本の柱穴がある。

床面は概ねフラットで、北側の主柱穴の間に炉が見られる。72×58cm深さ15cmの規模であり、内部に安山岩の細長い石が置かれていた。炉の埋土は珪と砂で、上方に灰、焼土粒、炭化物などがある。なお、住居跡内部には貯蔵穴は発見されない。

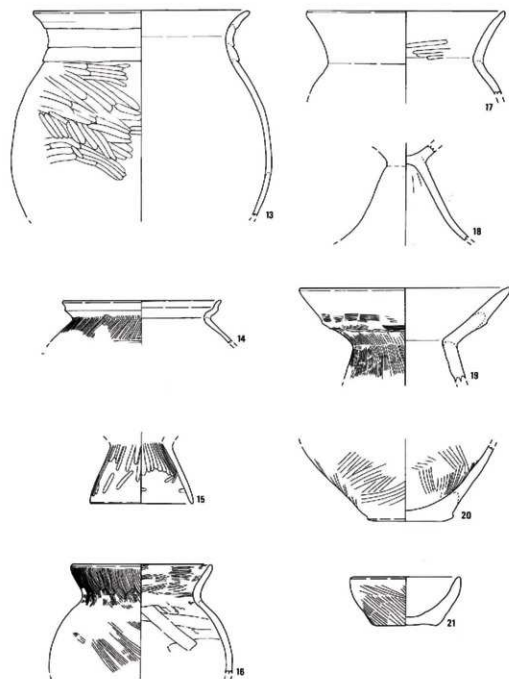
住居跡覆土には浅間C軽石の層は認められず、C軽石は二次堆積物として土層中に混入していると考えられる。

図7~12は出土した遺物である。1と2の構式土器は櫛歯状文が省略され、頸部も波状文のみとなっている。5・10・11・13は吉ヶ谷式の土器である。10は胴上部に縄文を施し、5・11・13は口縁から頸部にかけ、粘土紐の積み上げ痕を意図的に残している。5はさらにへら状工具により外面を撫でている。12と14から17、19から21は外来系土器で18は構式土器の高坏である。15は、くの字口縁台付甕の台部、16の甕は外面と口縁内面に刷毛目調整されている。6・7は構式の櫛歯状文を持つ土器だが、外面は外来系の刷毛目調整技法を取り入れている。24は4カ所にくぼみのある石で安山岩製。26は台石に使用されたものであろうか、上面に擦痕が認められる。なお、14のS字甕は、他の土器とよりも時期の下土器と考えられる。

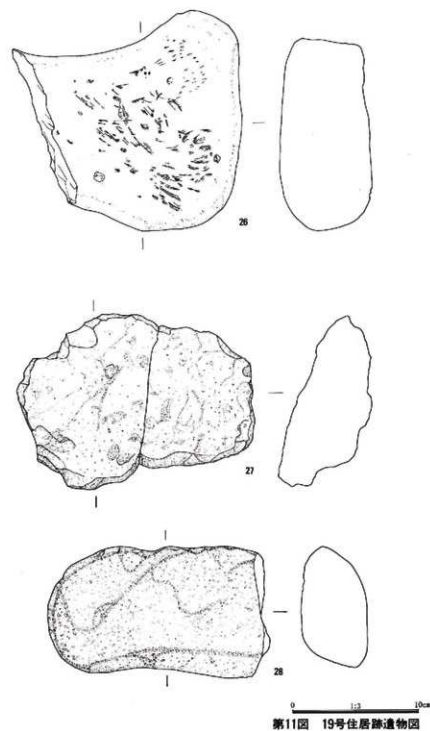
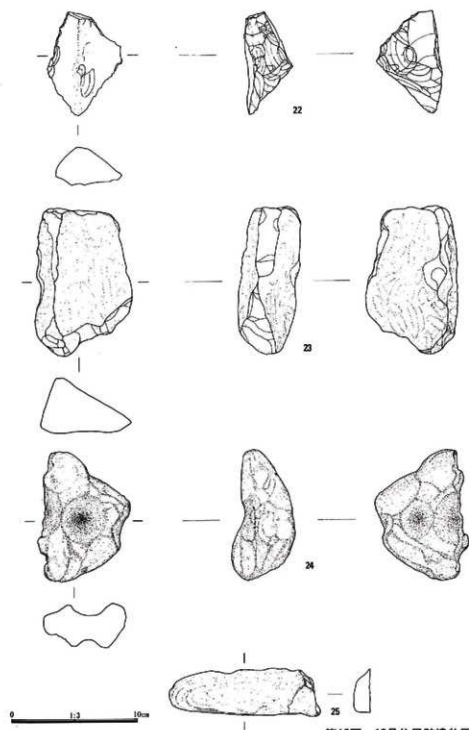


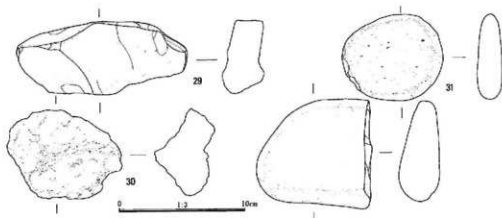


第8图 19号住居跡遺物図



第9图 19号住居跡遺物図





第12図 19号住居跡遺物図

5号住居跡

1区の北隅で検出した。樽式土器が出土した8号住居跡と56号土坑を切る。南には4世紀後半に位置づけられる2号・3号住居跡がある。また、5号住居跡の西には、中世後半の内耳鍋片が出土した1号溝がある。1号溝は南方の2号・3号溝に連なるもので土地を区画する意識がある溝であり、小規模の屋敷跡が存在したと推定される。

5号住居跡の平面は、北辺がやや広い幾分いびつな方形である。主軸はN—1°—W、規模は東西2.8m南北2.95m、確認面からの深さは10cm程度である。柱穴はなく住居跡南東隅に貯蔵穴がある。貯蔵穴は直径0.7m深さ45cmの規模で、中段を有し底がややすぼまっている。中段までの深さは20cmである。

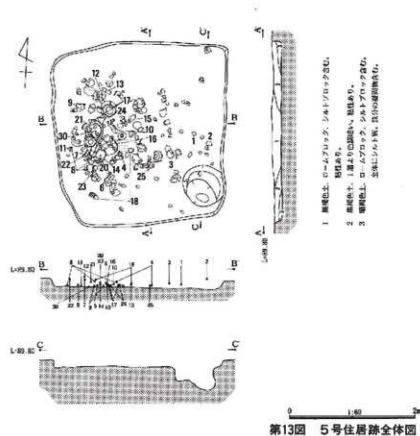
住居跡の床面は殆どフラットで壁に近いほどかたいた。住居跡の中央やや西の床面には焼土が認められる。掘り込みはないが炉と考えられる。

5号住居跡は、古式段階の須恵器坏身が出土している。同時に多量の土師器が出土しており、手づくね土器1点が含まれる。

5号以外に、1区と2区で5世紀の土器が出土しかマドでなく炉をもつ住居跡は、24号・28号がある。24号・28号は、1区の中央やや南に位置する住居跡である。いずれも平面が方形で、掘り込みのない炉を有している。

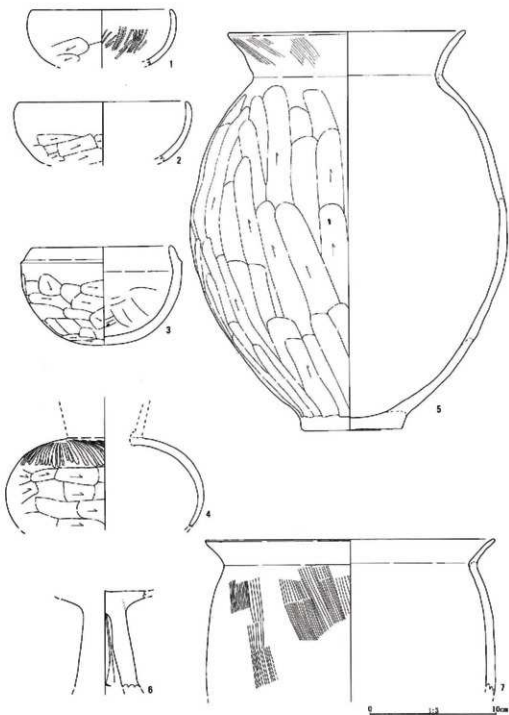
24・28号住居跡は土器の出土が少ない。5号住居跡の土器が大量に出土するのとは対照的である。5号住居跡は、中央から西にかけり床面から折り重なるように大量の土器が出土している、一挙に投棄されたようである。それに対し、24号と28号は、住居廃棄後に土砂が埋没するにつれ土器が捨てられたものであろう。

5号住居跡は意図的に土器を投棄したと見られること、祭祀関連の遺跡で出土の多い手づくね土器も含まれていることから、祭祀に関連する可能性もある。

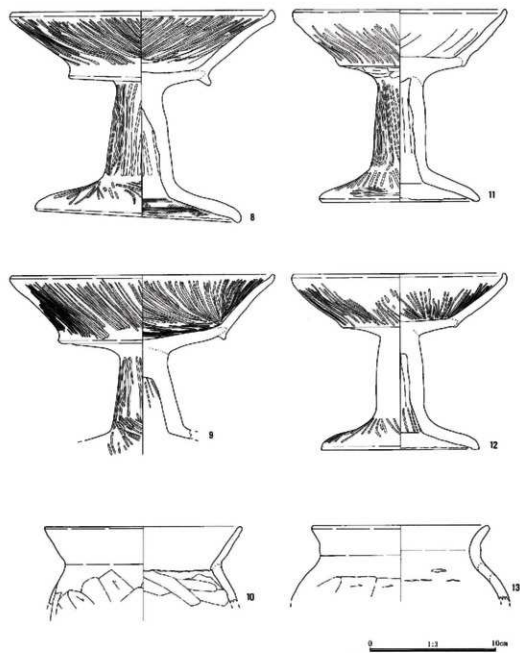


第13図 5号住居跡全体図

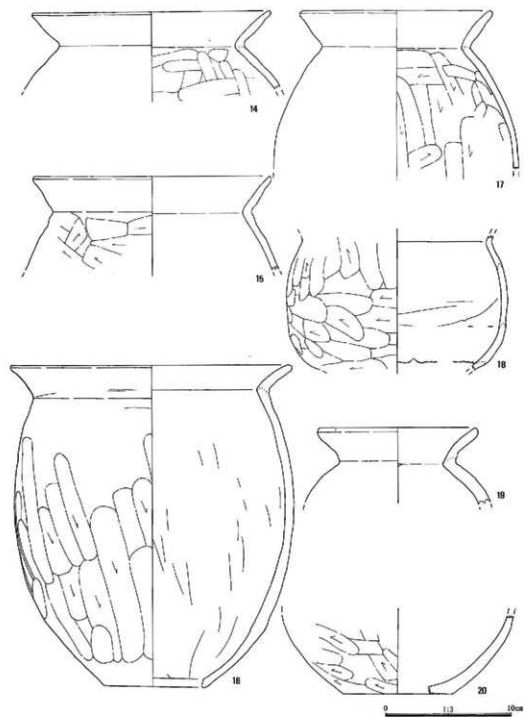
図14から17は、5号住居跡から出土した土器である。1・2は土師器の素口縁環、1には内面に暗文が見られる。3は深い碗、4は埴である。埴の口縁部は欠損している。埴部はやや扁平で上面は寛磨きである。5は長胴甕、口縁外面は部分的に刷毛調整である。6は高杯、7は口径の大きな甕である。器内が薄く外面刷毛調整である。8・9・11・12は高杯である。8・9は大振りで胴もがっちりしている。それに対し11・12は口径と底径が小さく、土器のつくりも8・9と異なり系譜の違いが考えられる。なお、高杯は4点とも内外面に寛磨きによる暗文が見られる。10、13から15、17から20は甕である。10・14・17・19の胴部外面は撫で調整である。それに対し23の甕は胴上部撫で、下半部寛磨りである。24は口縁に二重口縁の名残が見られる。25は底部しか残存していないが、かなり大きな土器であろう。16は胴の大きく膨らむ大型の甕である。21は須恵器坏身、体部は浅くたちあがりの先端は丸い。底体部の回転寛磨りの単位は細かく、TK216併行期と考えられる。



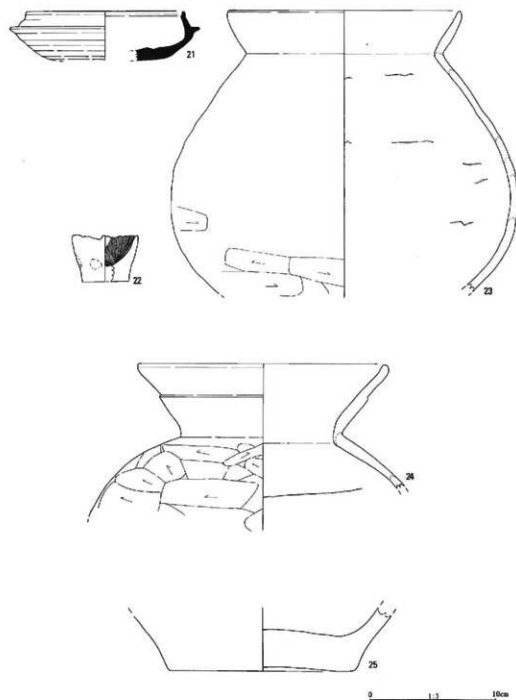
第14图 5号住居跡遺物図



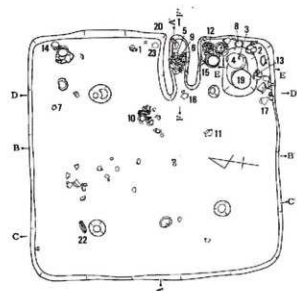
第15图 5号住居跡遺物図



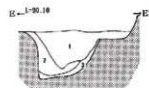
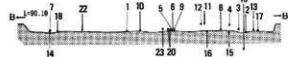
第16図 5号住居跡遺物図



第17図 5号住居跡遺物図



- 1 黄褐色土、クレーン状の土質が露出している。
- 2 黄褐色土、クレーン状の土質が露出している。
- 3 黄褐色土、クレーン状の土質が露出している。



- 1 黄褐色土、黄土層、黄褐色土が露出している。
- 2 黄褐色土、1層に露出した黄褐色土が露出している。
- 3 シェルトと黄褐色土の露出層。



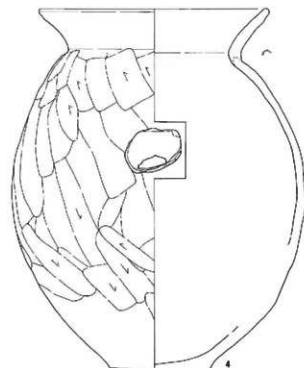
- 1 黄褐色土、黄土層が露出している。
- 2 黄褐色土、灰土層の層、黄土層が露出している。
- 3 黄褐色土、灰土層の層、黄土層が露出している。
- 4 黄褐色土、灰土層、黄土層が露出している。
- 5 黄褐色土、灰土層の層、黄土層が露出している。
- 6 黄褐色土、灰土層の層、黄土層が露出している。
- 7 黄褐色土、灰土層の層、黄土層が露出している。

第18図 6号住居跡全体図

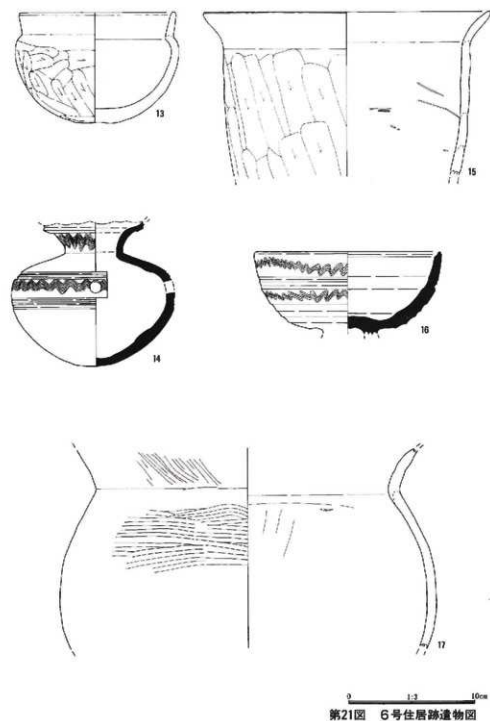
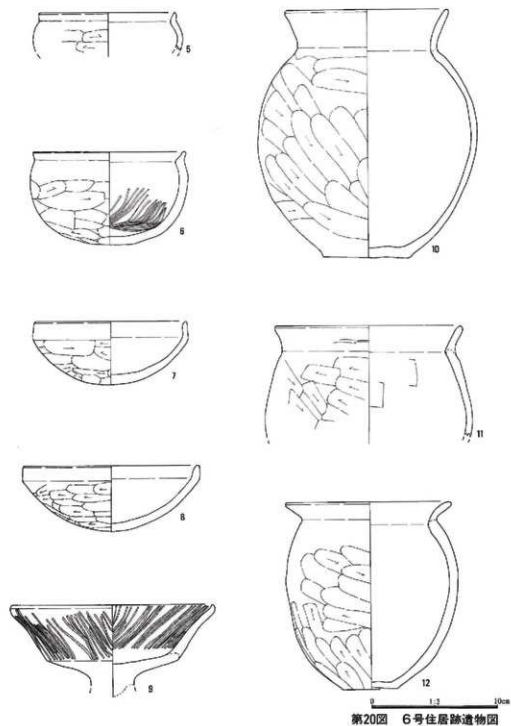
6号住居跡

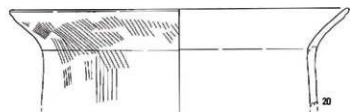
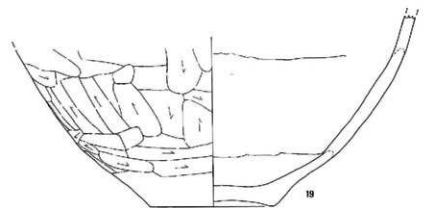
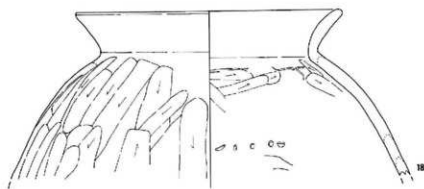
1区で検出されたカマドを持つ住居跡である。住居の規模は3.90×4.00mの不整形平面、確認面からの深さは約15cmである。住居の主軸はN-81°-Eをとる。柱穴は4本検出された。柱穴は径18~30cm、深さは30~36cm程度である。構式土器が出土した、48・51・53・58号住居跡を切る。カマドは東壁の中央やや南にある。袖幅0.4m奥行1.05mである。カマド内には焼土・炭化物・灰層が認められた。カマドの南には貯蔵穴がある。平面が隅丸長方形で0.82m×0.56m深さ40cmである。遺物はカマド及び貯蔵穴周辺からの出土が多い。

遺物は土師器杯、高杯、甕、瓶。須恵器の甕、無蓋高杯、他に萬福石などがある。甕はその特徴からTK23、無蓋高杯はTK208から23併行期に位置づけられる。

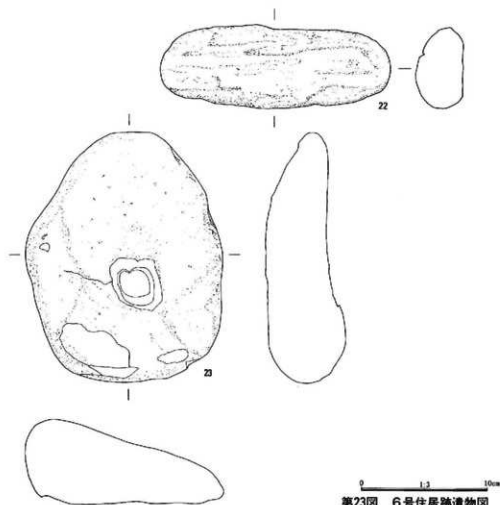


第19図 6号住居跡遺物図





第22図 6号住居跡遺物図



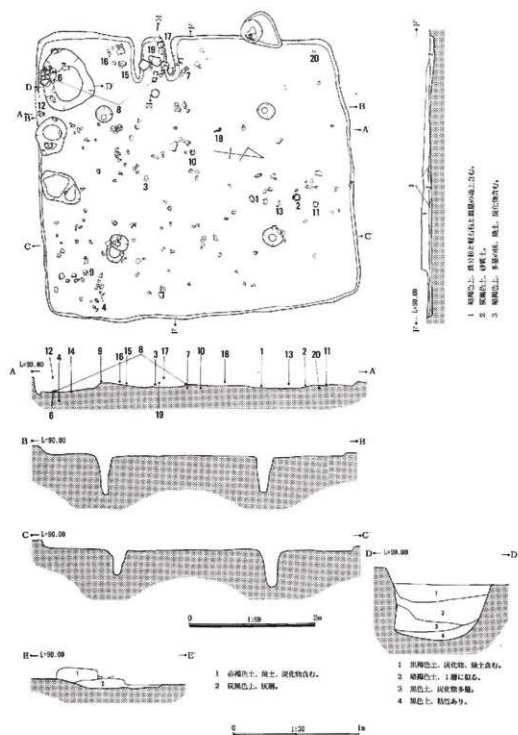
第23図 6号住居跡遺物図

15号住居跡

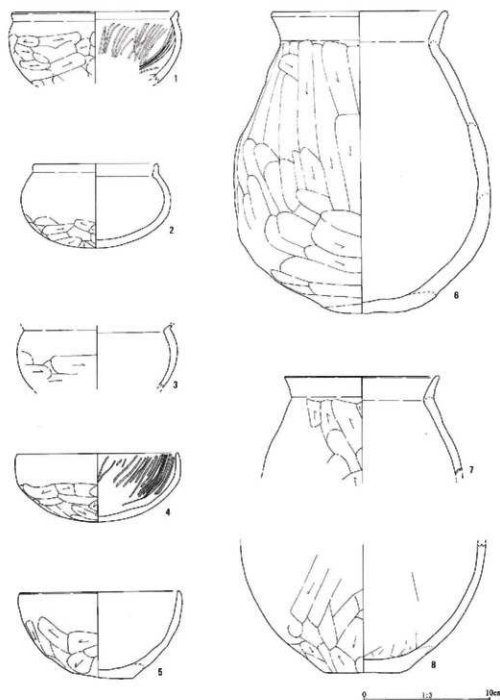
2区中央西で検出された。唯一西壁にカマドを持つ住居跡である。規模は5.00×4.80mで、重みはあるが、ほぼ方形である。確認面からの深さは約20cm、住居の主軸はN-81°-Eである。樽式土器が出土した13号、63号、19号、古式土師器を伴う17号住居跡を切る。

カマドは粘土貼付で、西壁の中央やや南寄りに偏して構築されている。煙道は確認できない。袖幅60cm奥行75cmである。貯蔵穴はカマドの南、住居跡南西隅にある。平面は不整形で95×80cm、深さ45cmである。柱穴は4本検出した。径30cm程度で深さは40cm～60cmである。

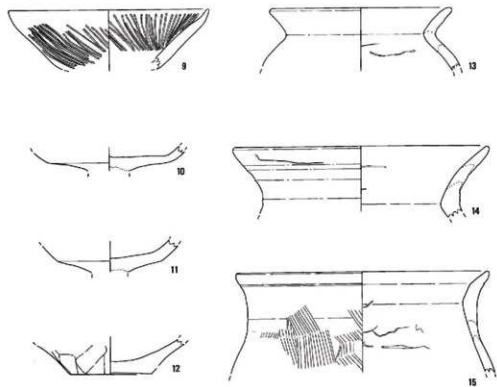
出土遺物は土師器環、碗、高杯、甕。17は樽式土器の甕である。20は石製模造品、21は円板状土製品。周囲に焼成後の削痕が見られる。



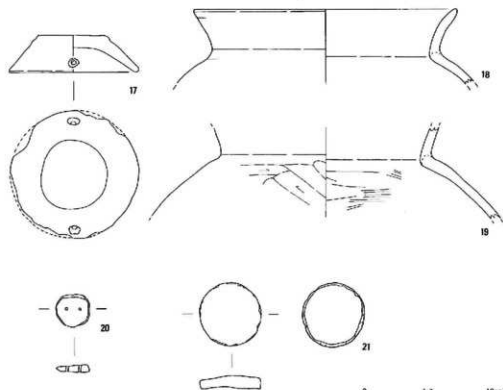
第24図 15号住居跡全体図



第25図 15号住居跡遺物図



第26図 15号住居跡遺物図



第27図 15号住居跡遺物図

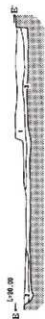
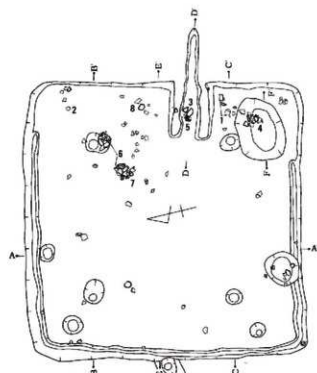
22号住居跡

1区南端で検出された。櫛式土器が出土した55号住居跡、5世紀の5号溝を切る。

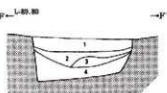
22号住居跡は5世紀後半の土器が出土している。22号と同時期と見られる住居跡は付近に多い。22号の北には21号、33号、西に20号、東では41号、34号、南の7号などである。これらは重複することなく、それぞれがある程度の間隔をもっている。

22号住居跡の主軸は、N-80°-Wである。平面は方形で、東西4.5m南北4.4m深さ10cm程度である。床面は概ねフラットでかなりかたい。壁の立ち上がりはやや斜めである。カマドは東壁中央やや南寄りにある。袖幅0.5m奥行0.9m、煙道は長さ0.9m確認できる。貯蔵穴はカマドの南にある。平面が長方形で、1.1m×0.7m深さ35cmの規模である。主柱穴は4本ある。四隅にあり深さ40-45cmである。周溝は北壁下が上幅15cm、深さ15cmであるが、西・南壁下では浅い。

遺物は比較的少ないが、他の住居跡同様カマドないし貯蔵穴周辺から出土する傾向にある。1から5までは土師器の坏、1と2には内面に荒磨きによる暗文がある。6から8は土師器甕、口縁横撫で、外面荒削りである。8の甕はやや胴部が球形である。



- 1 築込土、灰土層あり。
- 2 築込土、灰土層あり。
- 3 築込土、灰土層あり。

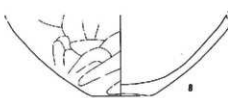
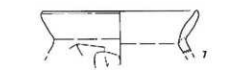
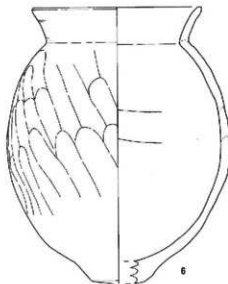
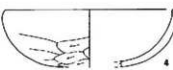
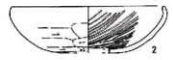


- 1 築込土、やや粘性あり。
- 2 築込土、やや粘性あり。
- 3 築込土、やや粘性あり。
- 4 築込土、やや粘性あり。

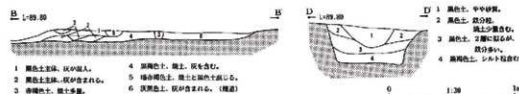
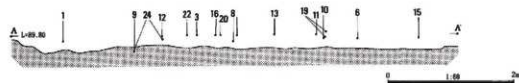
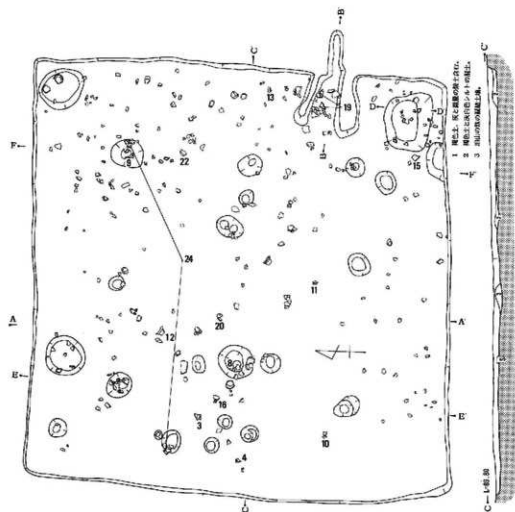


- 1 灰土層上の築込土。
- 2 1層より灰が多い。
- 3 灰土ブロック。
- 4 灰の層。
- 5 灰土ブロック。
- 6 灰土層上に灰土層。
- 7 灰の層。
- 8 築込土。
- 9 築込土。

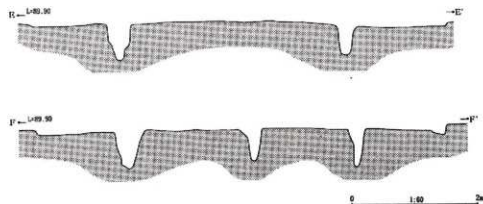
第28図 22号住居跡全体図



第29図 22号住居跡遺物図



第30図 31号住居跡全体図



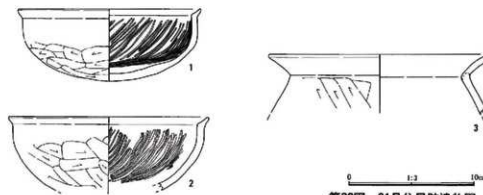
第31図 31号住居跡柱穴エレベーション図

31号住居跡

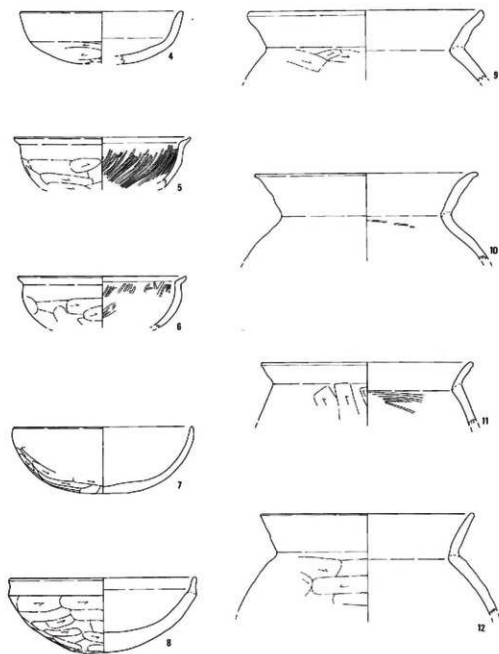
1区南西隅で検出した。今回の発掘調査で発見した当該期の住居跡の中では最も大型である。31号住居跡は、古式土師器の出土した43号住居跡、方形で炉を持ち5世紀と考えられる67号住居跡を切る。

住居跡は主軸をN-88°-Wにとる。平面はややゆがんだ方形で、東西6.9m南北6.7m深さ17cm程度である。竈は住居跡東辺の南寄りの位置にある。カマドの袖幅0.75m奥行1.0m、煙道は長さ0.7m確認できる。貯蔵穴はカマドの南にある。隅丸台形で、0.95m×0.75m深さ30cmである。主柱穴は四隅の4本以外に、その中間の位置にもある。床面は概ねフラットでややかたい。

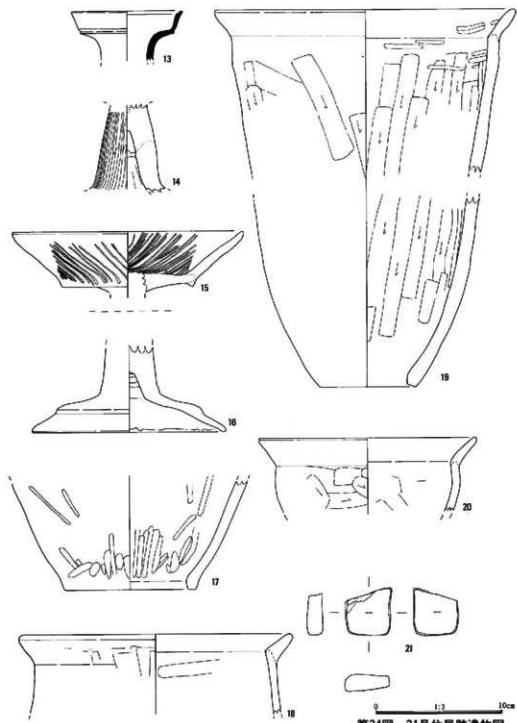
遺物は住居跡の全面に破片の状態で出土した。土師器環、埴、高杯、甕、瓶、須恵器匙、砥石などがある。匙は口縁の部分の破片で、その形態の特徴から丁K208併行期と考えられる。土師器釜23と土師器甕24は、外面の寛磨きが特徴的で、器形も特異である。



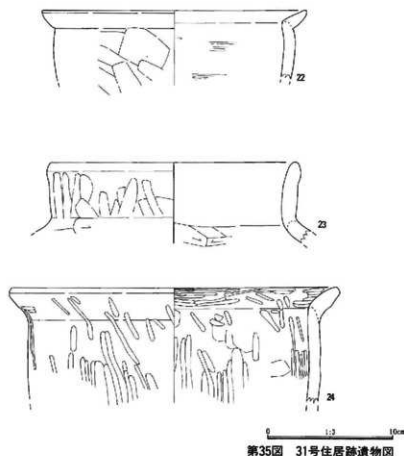
第32図 31号住居跡遺物図



第33图 31号住居跡遺物図



第34图 31号住居跡遺物図

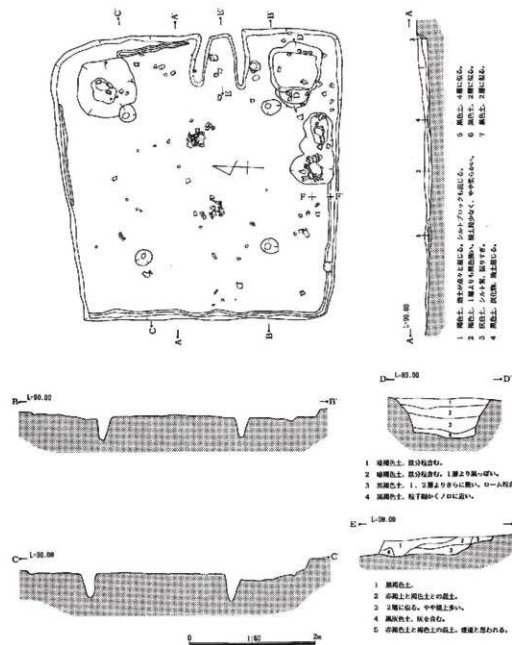


第35図 31号住居跡遺物図

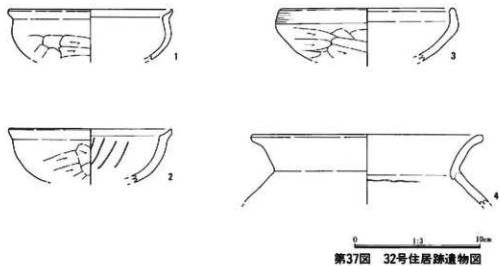
32号住居跡

1区中央東寄りで見出した住居跡である。構式土器が出土した44号住居跡と重複し、これより新しい。住居跡は主軸をN-85°Eにとる。東辺が4.5m、西辺は3.9mと短くすばまり、北・南辺は4.2~4.3m程度の不整形を示す。確認面からの深さは西辺が浅く5cm、東辺では15cmであった。カマドは東壁のはば中央にある。袖幅70cm奥行き90cmである。煙道は削平され確認できない。貯蔵穴はカマドの南、住居の南東隅にある。平面が台形で規模は1.0m×0.8m深さ32cmを測る。柱穴は四隅に4本、深さ30~40cmである。住居跡の西、南西、北東の壁際には周溝が走る。

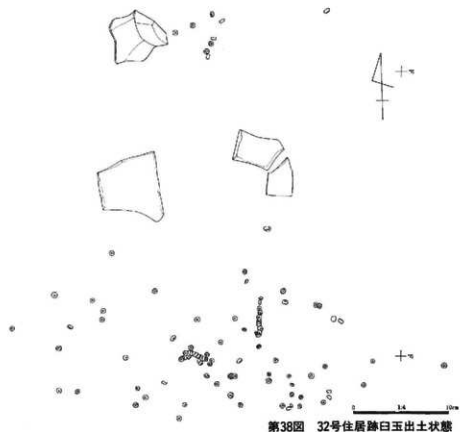
遺物には土師器の坏、甕、石製模造品白玉がある。石製模造品白玉は、住居跡南壁際にまよって出土した。合計112点の白玉は45cm×45cm程度の範囲で、床面より若干上の位置での出土である。白玉が連なるような所もあり、当初は紐に通されていたと考えられる。これらの白玉は、祭祀に関連する遺物と推定される。



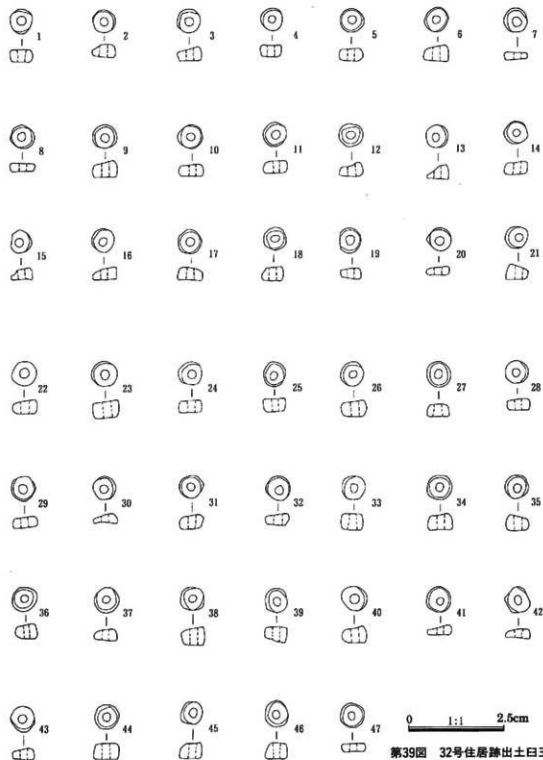
第36図 32号住居跡全体図



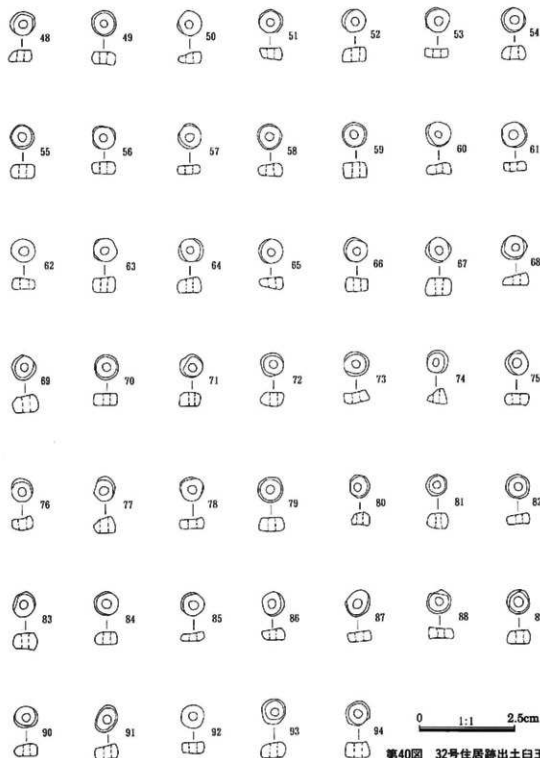
第37图 32号住居跡遺物図



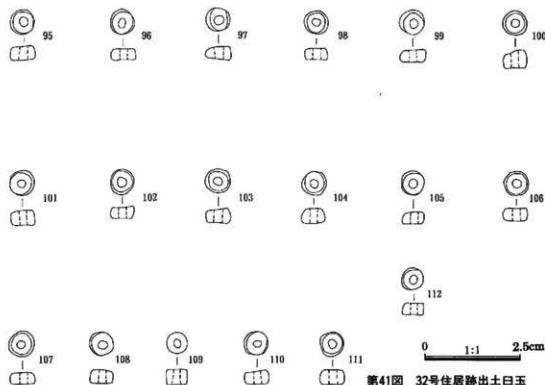
第38图 32号住居跡白土状態



第39图 32号住居跡出土白土



第40図 32号住居跡出土白土玉



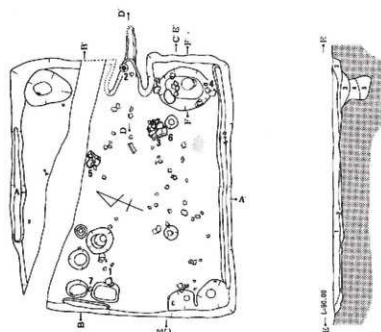
第41図 32号住居跡出土白土玉

33号住居跡

1区の南東部で検出した。住居跡の北側は中世の3号溝と重複し、これに切られる。33号住居跡は主軸をN—67—Eにとる。この33号の南にある41号、34号と比較すると、カマド位置及び住居跡の軸方向がほぼ等しい。また、この41号と34号は、33号住居跡と出土遺物が似通っている。

住居跡の平面は長方形、東西4.2m南北3.5m深き12cmである。カマドは東壁中央付近にある。袖幅60cm奥行60cmであるが、左袖の外側は後世の溝によって削られている。煙道は長さ0.5m残っている。カマドの燃焼部北東隅には、高坏の脚（図43—2）が底部を竈底に接した状態で置かれてあった。支脚と考えられる。貯蔵穴はカマドの南にある。平面は長方形で、85×70cm深き45cmの規模である。やや袋状の掘方をしていいる。柱穴は4本構成と考えられるが、北東の1本は3号溝に削られ確認できない。柱穴の深さは30～40cmである。住居跡の南辺と北辺の直下で測溝を確認した。南辺では、上幅15cm、深さ6cm程度である。

遺物は土師器が出土している。1は土師器坏、内面に範磨きによる暗文が見られる。2は高坏の脚部、外面は範磨き調整である。3～7は土師器の甕である。外面範磨り、内面撫で調整のものが大部分である。6の口縁部には、横撫でだけでなく刷毛調整を行った痕跡が認められる。

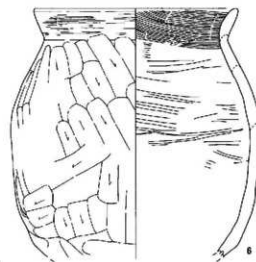
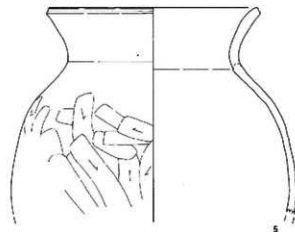
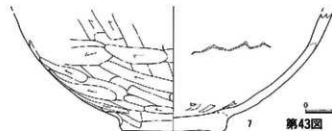
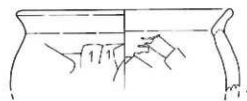
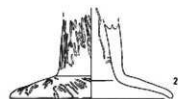


- 1 暗褐色土、黒土、灰が混ざり、
- 2 暗褐色土、黒土より暗褐色土、
- 3 暗褐色土、黒土、灰が混ざり、
- 4 暗褐色土、黒土、灰が混ざり、
- 5 暗褐色土、黒土、灰が混ざり、



- 1 暗褐色土、2層に似る、黒土が混ざり、
- 2 暗褐色土、黒土多量に混ざり、
- 3 暗褐色土、黒土に灰少量混ざり、
- 4 暗褐色土、灰を少量とする、黒土少量、
- 5 暗褐色土、黒土を少量とする、
- 6 暗褐色土、黒土に灰少量、
- 7 暗褐色土、灰を主体とする、黒土少量、

第42図 33号住居跡全体図

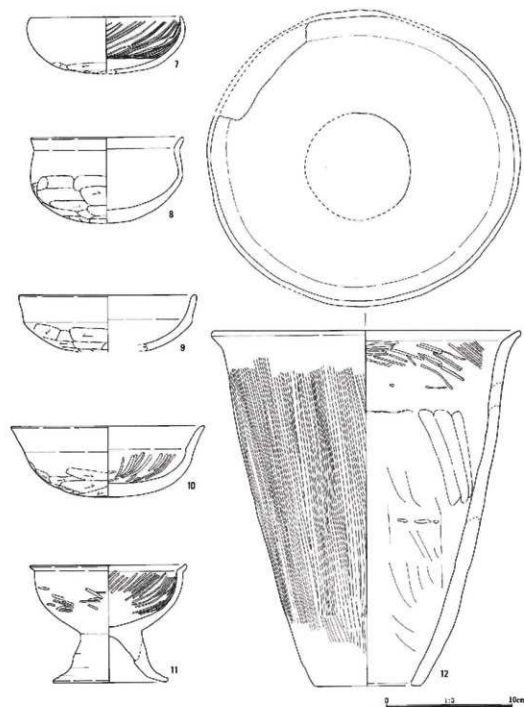


第43図 33号住居跡遺物図

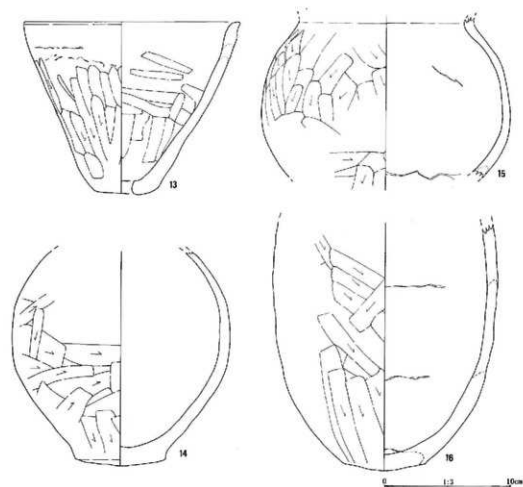
1区南隅で検出した。構式土器が出土した56号住居跡、及び83号土坑、84号土坑を切る。住居跡の主軸はN—68°—Eにとる。規模は4.5×4.6m、深さ15cm程度である。カマドは東辺中央やや南にある。袖幅60cm奥行80cmである。貯蔵穴はカマドの南にある。不整形円で1.5×1.1m、深さ32cmである。柱穴は北東、北西、南西が一般的な位置にあるが、南東の柱穴はやや西にずれている。カマド、貯蔵穴位置を除いて周溝が巡る。

[illegible]

- 46 -



第46図 34号住居跡遺物図

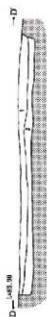
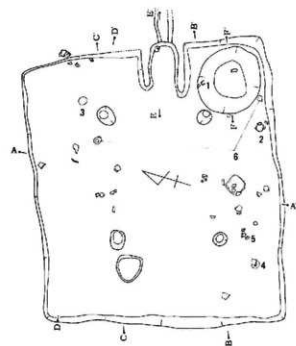


第47図 34号住居跡遺物図

41号住居跡

1区南東部で検出した。櫛式土器が出土した55号住居跡と重複し、これを切る。また、5世紀の35号住居跡とも重複するが、41号が新しい。住居跡の規模は4.50×3.95mでやや東西に長い方形、確認面からの深さは約20cmである。主軸はN-71°-Eを示す。カマドは東壁中央やや南寄りにあり、他の住居跡と同様に灰白色粘土で構築されている。軸幅60cm奥行75cmで、右袖がやや長い。煙道は東に向かって伸び35号住居跡と重複する。貯蔵穴はカマドの南にある。平面はほぼ円形で、直径1.0m深さ50cmの規模である。柱穴は4本確認できた。径25～30cm程度の円形で、深さ40～55cmであった。

遺物は少量の土師器片が一様に散った状況である。1、2は土師器内斜口縁环、3は碗、4は高杯の脚部、5・6は小型の甕、7はやや大きな甕である。



- 1 堀割跡、ロームを多く含む土、灰色を呈している。
(堀は、堀割跡も少なく、1層と見られる。)
- 2 堀割跡、土質はロームを多く含む土、灰色を呈している。
(堀は、堀割跡も少なく、1層と見られる。)



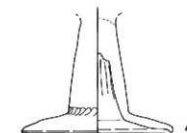
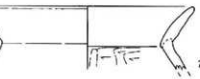
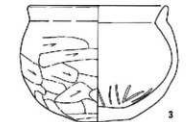
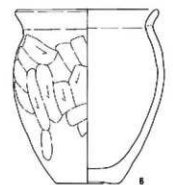
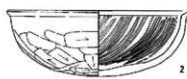
- 1 堀割跡、土質はロームを多く含む土、灰色を呈している。
(堀は、堀割跡も少なく、1層と見られる。)
- 2 堀割跡、土質はロームを多く含む土、灰色を呈している。
(堀は、堀割跡も少なく、1層と見られる。)
- 3 堀割跡、土質はロームを多く含む土、灰色を呈している。
(堀は、堀割跡も少なく、1層と見られる。)
- 4 堀割跡、土質はロームを多く含む土、灰色を呈している。
(堀は、堀割跡も少なく、1層と見られる。)
- 5 堀割跡、土質はロームを多く含む土、灰色を呈している。
(堀は、堀割跡も少なく、1層と見られる。)



- 1 堀割跡、土質はロームを多く含む土、灰色を呈している。
(堀は、堀割跡も少なく、1層と見られる。)
- 2 堀割跡、土質はロームを多く含む土、灰色を呈している。
(堀は、堀割跡も少なく、1層と見られる。)
- 3 堀割跡、土質はロームを多く含む土、灰色を呈している。
(堀は、堀割跡も少なく、1層と見られる。)

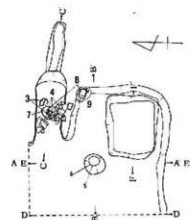
0 1:50 2m

第48図 41号住居跡全体図



0 1:50 10m

第49図 41号住居跡遺物図



- 1 灰土層、土壌面。
- 2 灰土層、土壌面。
- 3 灰土層、土壌面。
- 4 灰土層、土壌面。
- 5 灰土層、土壌面。
- 6 灰土層、土壌面。
- 7 灰土層、土壌面。
- 8 灰土層、土壌面。
- 9 灰土層、土壌面。
- 10 灰土層、土壌面。



- 1 灰土層、土壌面。
- 2 灰土層、土壌面。
- 3 灰土層、土壌面。
- 4 灰土層、土壌面。
- 5 灰土層、土壌面。
- 6 灰土層、土壌面。



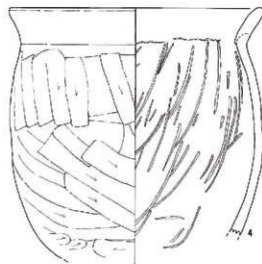
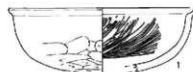
- 1 灰土層、土壌面。
- 2 灰土層、土壌面。
- 3 灰土層、土壌面。
- 4 灰土層、土壌面。
- 5 灰土層、土壌面。
- 6 灰土層、土壌面。
- 7 灰土層、土壌面。
- 8 灰土層、土壌面。
- 9 灰土層、土壌面。
- 10 灰土層、土壌面。

第50図 46号住居跡全体図

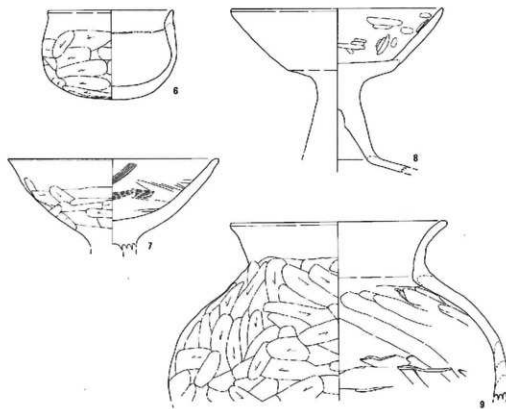
46号住居跡

1区南西隅で検出した。検出部分は住居跡全体からみれば南東隅にあたる部分で、面積は四分の一弱と思われる。大部分は調査区外のため全体の規模は不明である。主軸はN—85°Wにとる。カマドは右袖と燃焼部を完掘できた。焚口部の幅は60cm奥行105cm、煙道は長さ80cm確認できる。カマドの南に貯蔵穴がある。平面は1.0m×0.9mの長方形を示し、深さ60cm、底面はフラットではない。柱穴は直径30cmほどの円形で、深さ58cmであった。

出土遺物は電熱部に多い。1～3は土師器環である。1は内斜口縁、2・3は体部に段を持つ。4は土師器甕、胴部外面は焼削り、内面は焼削りである。5・6は土師器碗、5は外面焼削り内面焼削り調整、6の内面は丁寧な調整である。7・8は土師器高環である。7の坏部外面下半は焼削り、8の高環外面は焼削り後に雑な焼削り、坏部内面も焼削り後に雑な焼削りである。9は甕、かなり頸部がしまっている。外面は単位の細かい丁寧な焼削りである。



第51図 46号住居跡遺物図



第52図 46号住居跡遺物図

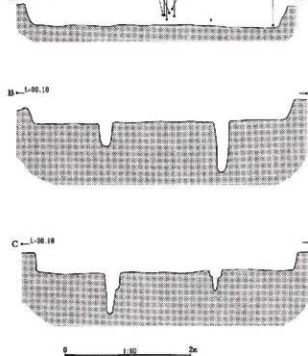
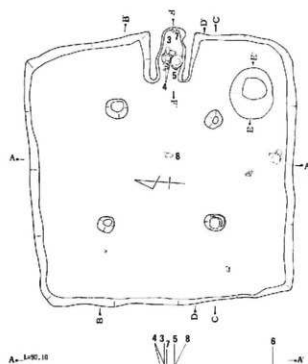
47号住居跡

1区北東隅にある。14号溝（樽式土器が多量に出土した溝）を切る。本住居跡の東側は低地であるので、本遺構のさらに東に住居跡の存在する可能性は薄い。

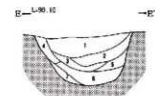
規模は一辺4.30mの正方形で、カマドのつく東辺は撫で用である。確認面からの深さは約36cm、床面はフラットであった。住居跡の主軸はN-81°-Eを示す。

東辺中央にカマドがある。袖幅50cm奥行85cmである。煙道は確認できない。貯蔵穴はカマドの南にある。平面は楕円形で0.83m×0.65m深さ38cmであった。柱穴は4本確認した。浅いもので35~40cm、深いのは75~80cmである。壁溝溝は確認できなかった。

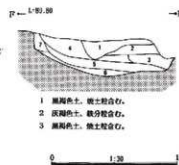
遺物はカマドの燃焼部からの出土が多い。1は土師器の内斜口縁環、2は小型の甕の台部。3は土師器甕、つくりが雑である。4~6は土師器甕、長胴化し胴部最大径がやや下にある。



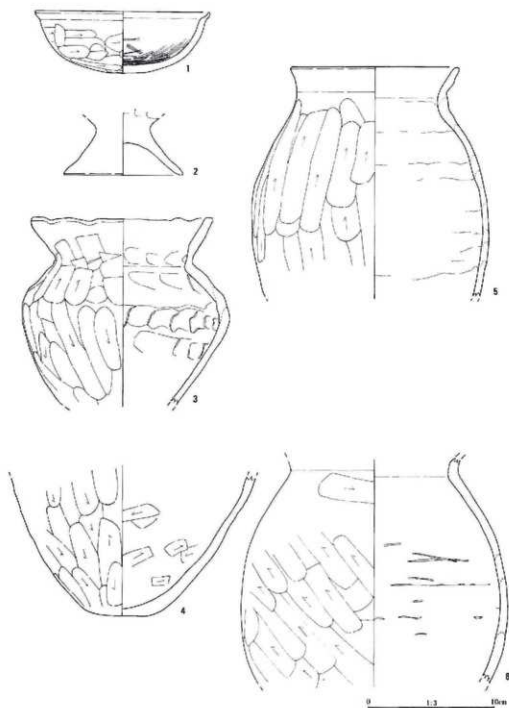
- 1 陶製土、焼土、灰を含む。
- 2 陶製土、1層に加えてシルト質の土を含む。
- 3 2層に比べて、シルト質の土が少なく、灰も少ない。
- 4 陶製土、4層より上部は確認できない。
- 5 陶製土、4層より上部は確認できない。
- 6 陶製土、4層より上部は確認できない。
- 7 陶製土、4層より上部は確認できない。



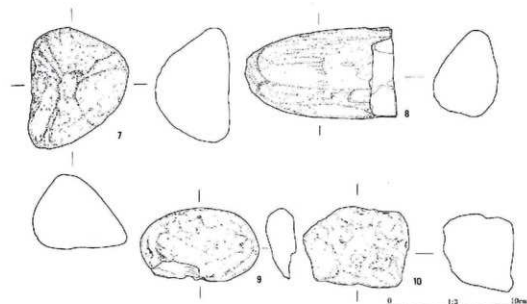
- 1 陶製土、焼土、灰を含む。
- 2 陶製土、1層に加えてシルト質の土を含む。
- 3 陶製土、2層は少ないが、灰も多い。
- 4 陶製土、2層は少ないが、灰も多い。
- 5 陶製土、灰を含む。
- 6 陶製土、灰を含む。
- 7 陶製土、灰を含む。



第53図 47号住居跡全体図



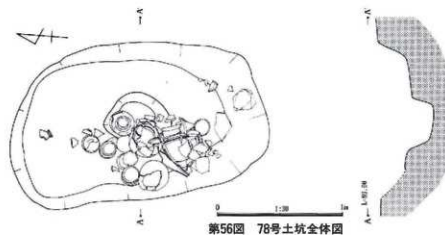
第54図 47号住居跡遺物図



第55図 47号住居跡遺物図

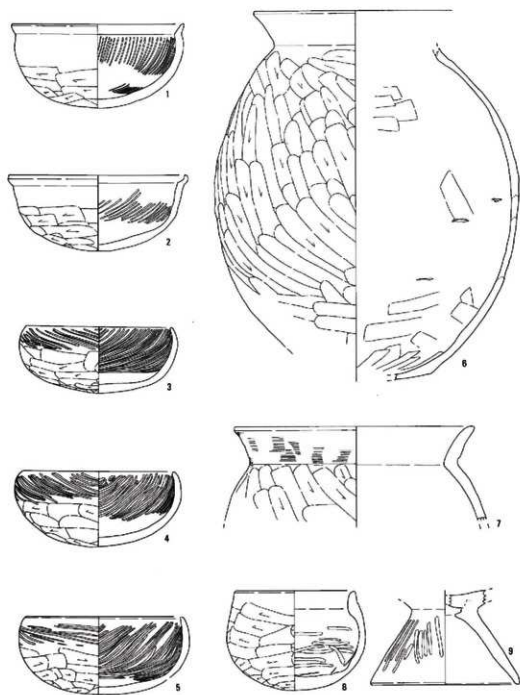
3. 土坑

78号土坑

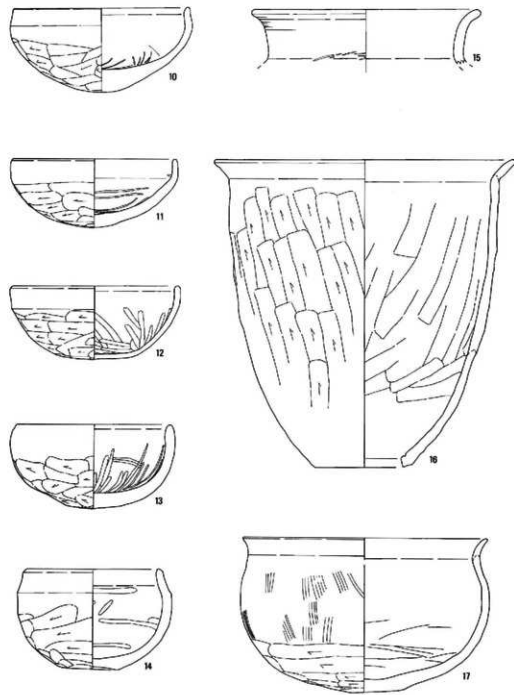


第56図 78号土坑全体図

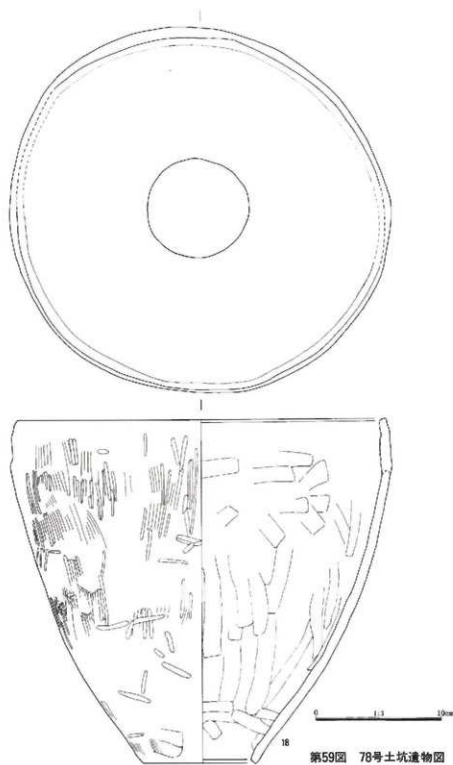
1区南西部で発見した。5世紀の67号住居跡と重複し、これを切る遺構である。土坑の平面は隅丸長方形で、主軸方向はN-7°-W。規模は2.1m×1.25m深さは50cmで、二段に掘り込まれている。多量の土器が土坑の南西部からまとまって出土した。器種は、坏、埴、甕、鉢、甗、台付甕である。完形に近いものが多く、鉢・坏などが入れ子状に重なっている状況も確認できる。これらの土器は意図的に土坑に埋めたとみられ、祭祀の色彩が濃いと考えられる。



第57图 78号土坑遺物図



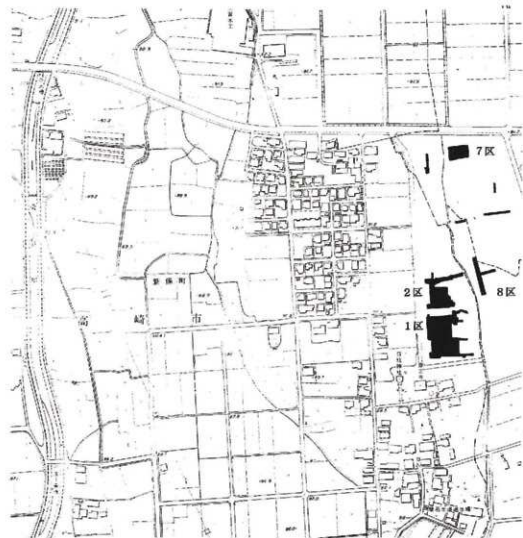
第58图 78号土坑遺物図



4. 溝跡

図60に付近の地形と調査した地点を示した。地図の西端を南北に走るのは染谷川である。染谷川のすぐ東は自然堤防で少し高いが、地図の高崎市の「崎」と書いてある辺りは低い土地である。「市」とあるすぐ東には小さな崖があり、その東側は小高く畑や住宅地となっている。この小高い土地は南北方向に細長く伸び北が高く南が低い。日枝神社の北東にあたる1・2区は、この微高地の東端であり、調査区北隅で浅間B軽石下水田跡を検出した7区及びその東側は低地帯となっていく。1区・2区を設定した場所と7区・8区の間には、圃場整備以前には小さな沢があった。その痕跡として小さな流れが図上に見える。

1区と2区で比較的大きな溝を検出した。北側は15号溝である。15号溝は2区の北隅



を東西方向に走る。15号溝は長さ49m調査した。西隅では調査区外となるため、溝は西に伸びると考えられる。また、東端では15号溝は中世の水路と交差、その東は調査区外である。

15号溝の向きはN-79°Eで、直線的である。上幅は1.5~2.2m、深さ25~90cm。深さは60~70cm程度の場所が多い。断面形は、東の方では逆台の字形、西はゆるやかなVの字形である。溝底の標高は、西端で89.417m、中央で89.392m、東端で89.346mと、西から東に向かって徐々に低くなっていく。

溝の下層は水成地積であるが、水が多量に流れた痕跡は見えず水路とは考えにくい。埋没土の中位に浅間C軽石主体の層が見いだせる。降灰の単位も確認できないため、C軽石の純層ではない。しかし、C軽石以外の混入土が殆どなく純層に近いと考えられる。軽石の上下から多量の土器が出土しているが、大部分は樽式土器で外来系土器を含む。図71-1~3はC軽石下層、4・5は上層である。2はC軽石下層から出土した東海東部系の土器である。

15号溝の西隅には北からの溝がある。幅1.1~1.5m、深さ32~42cmで、15号溝と同時存在の溝である。溝底は15号溝との交点付近で15号溝より35cm程度浅く、南端は北に比べて若干低い。

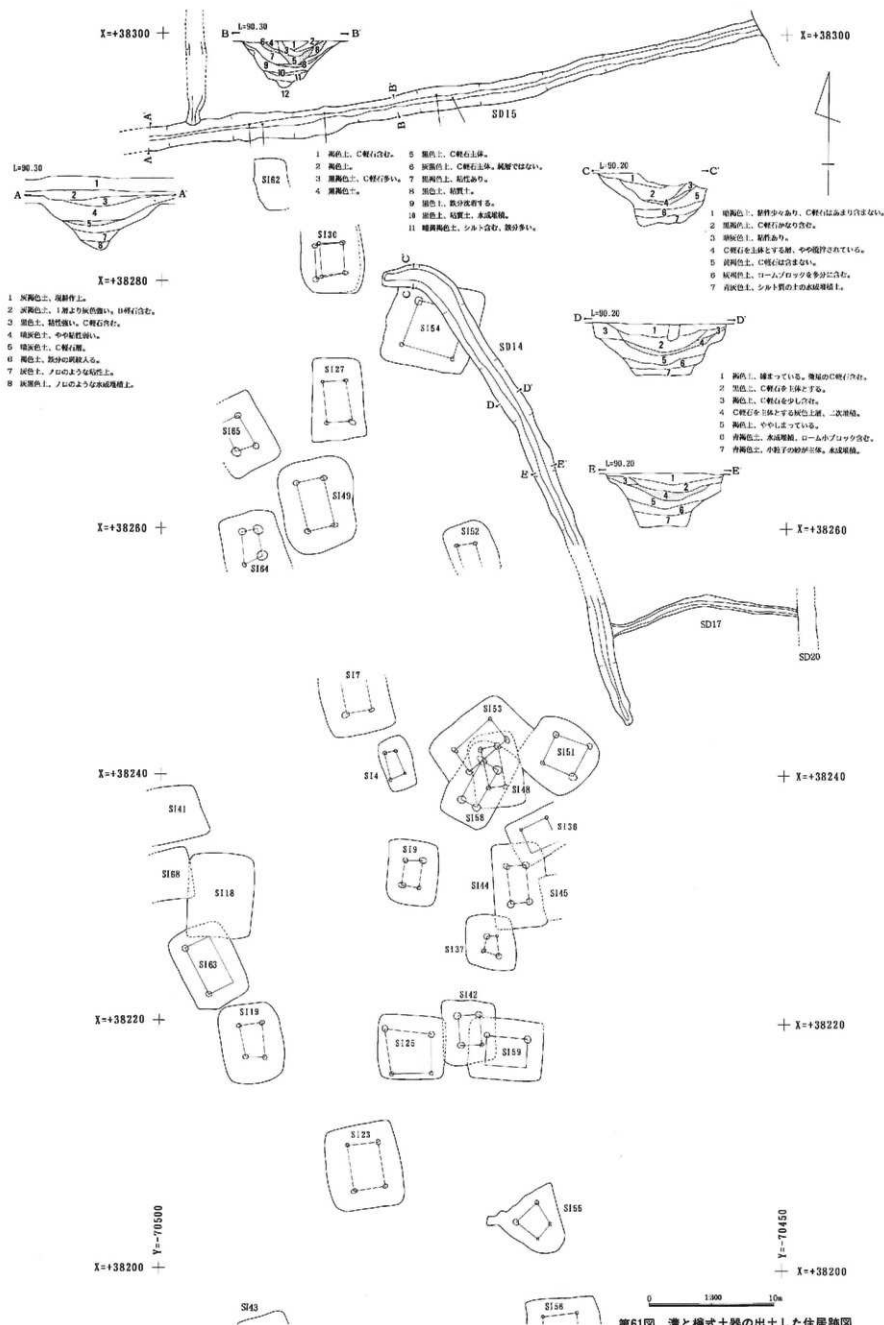
2区の中央やや北から1区の北東隅に向かって14号溝がある。54号住居跡と重複し、これを切る。54号住居跡と重複した付近では東に向くが、その後やや南向きになる。14号溝は、1区まで約40m直線的に続き、47号住居跡と重複しこれに切られる部分で途切れる。

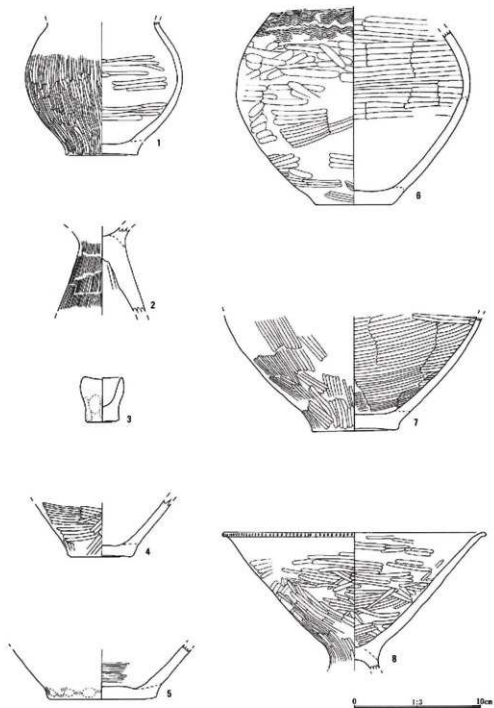
14号溝の上幅は1.3~2.2m、深さ75~90cmである。断面形は逆台の字形で、15号溝と同様に埋没土中位に純層に近い浅間C軽石主体の層がある。溝底の標高は北隅で89.572m、中央で89.329m、南端で89.016mと南に向かって低くなっていく。遺物の一部を図化した、図62~64まではC軽石主体層下部、図65以下、図71-36までは上部である。

1区の北東隅に17号溝がある。14号溝から分岐した同時存在の溝である。上幅0.6~0.7m深さ35~70cmで、東に向かって低くなっている。この17号溝は調査区端部で、中近世とみられる南北走行の20号溝と重複しこれに切られる。この東は調査区外である。

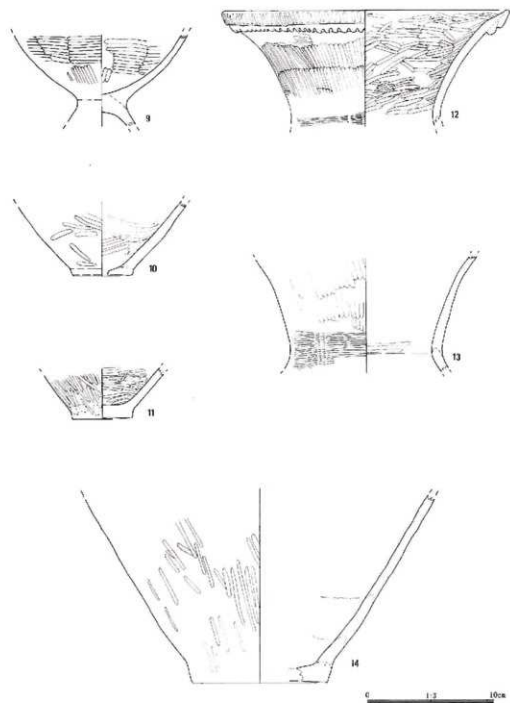
15号溝と14号溝は、埋没土のほぼ同じ位置にC軽石主体層があり、出土する土器も似通っていることから、同時期に存在した溝と推定される。なお、樽式土器と同時に古式土師器とされる外来系土器が19号・43号・49号・51号住居跡で出土している。弥生後期から古墳前期にかけて、これらの溝と住居跡が同時に存在したと推定される。

溝がムラと外界を区画する環濠かどうかは、全体を発掘していないため断定できない。ただし、15号溝は住居跡群を区画する位置にあり、環濠の可能性はある。住居群は微高地上にあり、東の間ノ沢を境にして低地となる。沢も住居群と外界とを分ける意識があったと推定される。なお、15号溝の溝底は西から沢がある東方向に向かって、14号溝では地形と同様に北から南に低くなる。溝は、集落の排水の役目も有していたと考えられる。

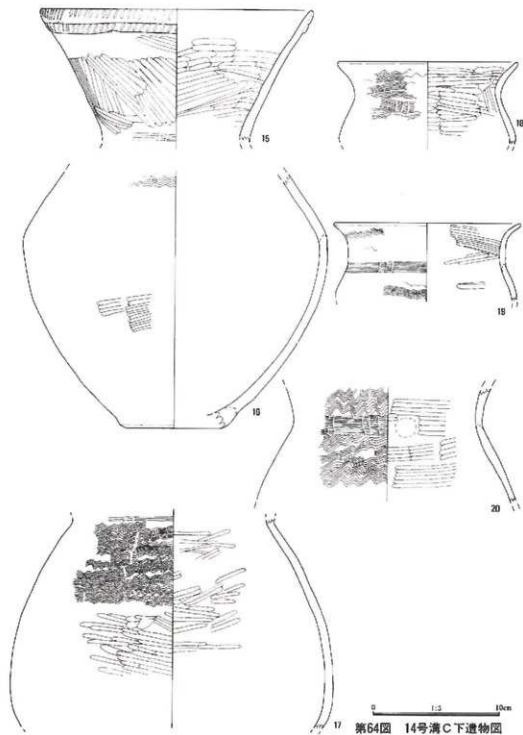




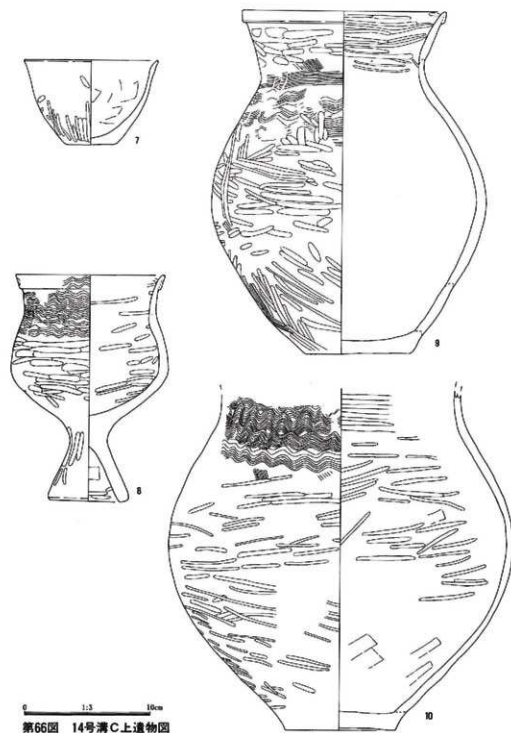
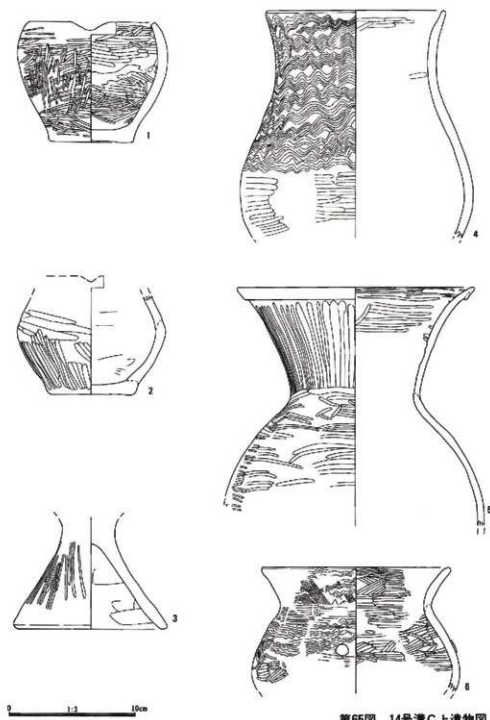
第62図 14号溝C下遺物図

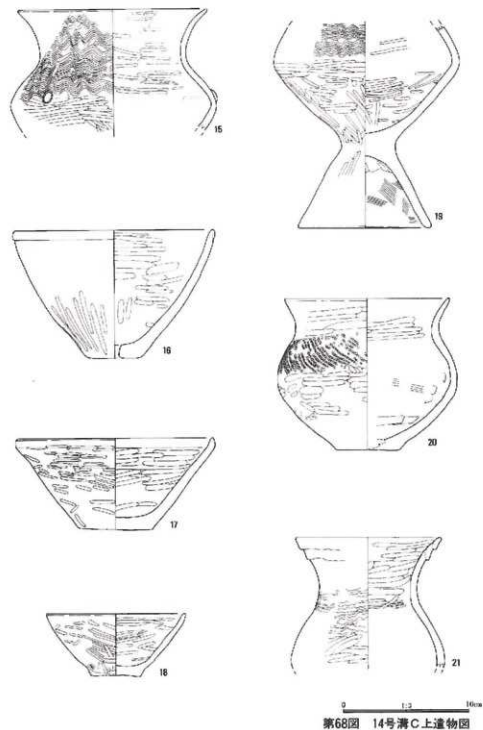
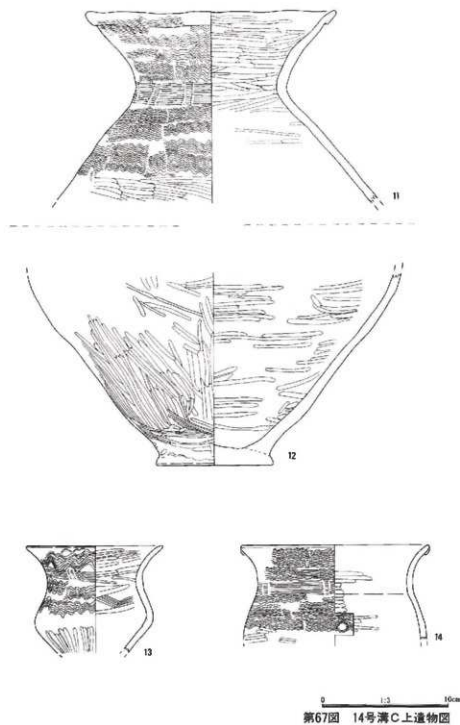


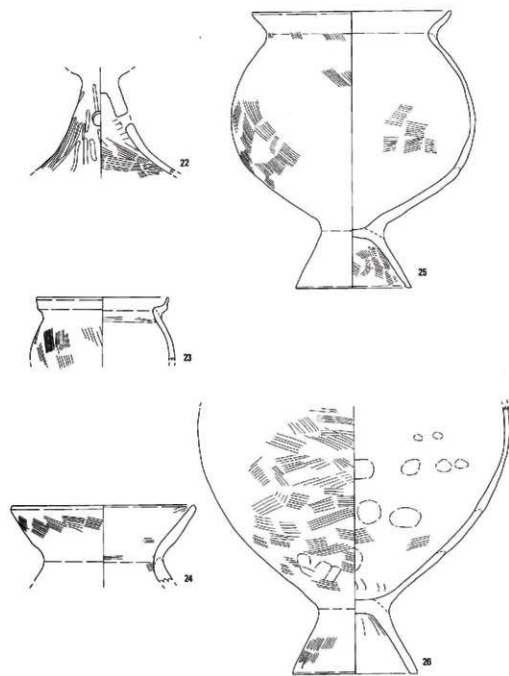
第63図 14号溝C下遺物図



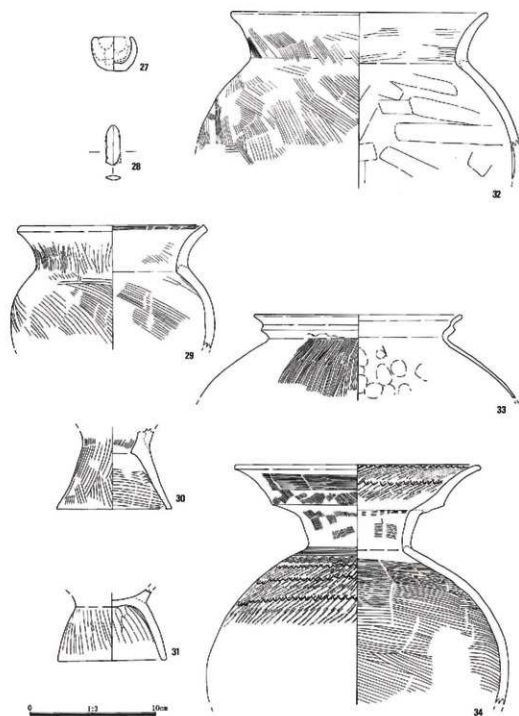
第64図 14号溝C下遺物図



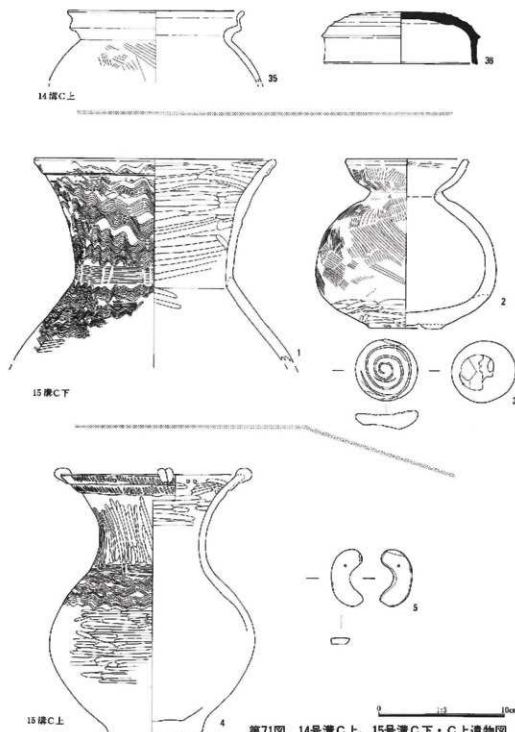




第69图 14号溝C上遺物図



第70图 14号溝C上遺物図



第71図 14号溝C上、15号溝C下・C上遺物図

5. 水田跡

今回の調査で水田跡を検出したのは調査区北隅の7区のみである。水田跡は、天仁元年(1108年)浅間山の噴火に伴う浅間B軽石に埋没していた。他の調査区は浅間B軽石の遺存が乏しく、水田跡は検出できなかった。

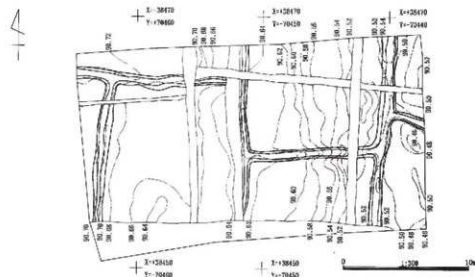
7区は27m×16mと東西に長く調査区を設定した。この付近は、浅間B軽石の残りがよく、当時の水田跡がそのままの状況で残っていた。全体の土地の傾斜は西が高く東が低く、特に東半部で傾斜が大きく等高線の間隔も狭くなっている。

水田跡とは別に、東西走行の溝が3本、南北の溝が3本走る。いずれの溝も浅間B軽石の二次堆積物を多量に含むため、中近世の水路の可能性が高い。

浅間B軽石に埋没した水田跡に伴う畦畔は、南北走行のものを3本、東西のを3本検出した。大畦畔はなく小畦畔のみである。南北走行の3本の畦畔方向は、西から北5度東、1度東、5度東である。畦畔の規模は、下幅で0.6m~1.0m、高さ3~5cm程度で、断面形はゆるやかな逆台形、もしくは扁平な逆Uの字形を示す。水田跡一枚全体が知れるものはないが、南北方向の畦がほぼ平行なため、水田跡は、長方形を基本としていと考えられる。規模は西の水田跡で東西幅10.5m~11.5m、東が10.5m~12.0mである。

水田土壌は粘性がやや高いシルトで黒褐色を呈する。また、水田面および畦畔上には、大小の不整形なくほみや足跡が数多く認められた。

水口は調査範囲内では確認できない。水の出し入れは、オーバーフローによって考えられる。



第72図 浅間B軽石下水田跡図